

Ⅱ 学習編

1 大口中学校の学力は低いのか？

このような話がまことしやかに聞こえてくるとき、何を根拠として述べられたものなのか、疑問に思います。なぜなら、学力が高いか低いかを示す指標、つまり他校と比べて学力の順位付けを図る指標など、無いからです。

また、「学力」が高いか低いかを論じる時、その観点は何なのかについて、社会的なコンセンサスは得られていないのが現状であります。したがって、その言葉の使い手によって、その意味内容は異なったものとなっています。

そのような中、学力を測る一定の指標として、現在、全国的に使われているものが、文部科学省が全国すべての小中学校（小学校は6年生、中学校は3年生が調査対象）を対象に毎年行う、「全国学力・学習状況調査」があります。

大口町におけるこの調査における平均正答率の全国結果との比較結果は、次の通りです。参考として、大口町3小学校の平均正答率の結果も掲載します。

<図：教科に関する調査結果「全国平均との比較」（平成30年度）>

大口町	国語A	国語B	算数A 数学A	算数B 数学B	理科
小学校	同等	同等	やや下回る	同等	同等
中学校	同等	同等	同等	やや下回る	同等

尚、上記表をはじめ、「全国学力学習状況調査」についての結果分析、並びに、大口町の学力向上対策については、大口町ホームページに公開してありますので、詳しくは、こちらでご確認ください。

【検索：大口町 全国学力・学習状況調査の結果について】

<http://www.town.oguchi.aichi.jp/4629.htm>

<備考>

全国学力・学習状況調査においても、この結果は児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てるものであり、児童生徒個人の順位付け、学校の序列化を図るものではないことには留意が必要です。（詳しくは、実施要領を参照ください。（文部科学省ホームページで公開））

2 教科センター方式のせいで、生徒が落ち着いて学習に取り組めないんじゃないの？

落ち着いて学習に取り組む。

このことは、学習内容の定着に欠かせない、根底にあるものと考えます。

そして、その行為を具体的に示すと、「人の話は最後まで聴く」ことだと考えます。「人の話」とは、先生の話であるし、学級の仲間の話でもあります。特に、「今は〇〇くんが話している、終わるまで待って」と勝手に話すことを許さない。このように、学級におけるルールの徹底が重要です。

同時に、学級の一員であること、大切にされている実感、何でも聞いてもらえるという気持ちを、子どもたちに持たせることが重要です。さらに、教室では間違えてもいいんだ、みんな聴いてくれる、という安心感を築くことが重要です。

大口町教育委員会では、このような基本的な学習習慣を定着させるために、「大口学びスタイル」を策定しました。大口学びスタイルとは、「授業」の視点から、小中学校が一貫して取り組む基本方針を示したものです。小学校1年生から中学校3年生まで、全ての学級、全ての教科の授業において、本方針に則り授業を行おうとしています。平成28年度から始め、今年で3年経ちます。

大口中学校は3つの小学校から集めます。3つの小学校の授業スタイルが揃っていれば、中学校に入学しての授業もスムーズに行われます。

教科センター方式を推進するための手立てとして、「大口学びスタイル」は重要な役割を担っています。

<参考>

「大口学びスタイル2018」は、大口町ホームページで公開しています。詳しくはこちらでご確認ください。

【検索：大口学びスタイル】

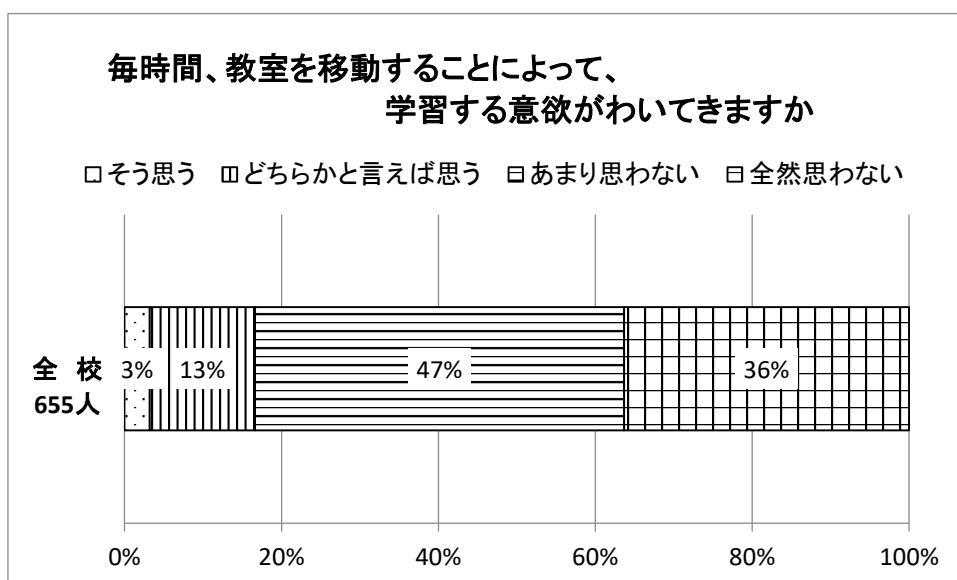
<http://www.town.oguchi.aichi.jp/4905.htm>

3 教科センター方式って、生徒が教室移動しているだけで、あんまり意味がないんじゃないの？

教科センター方式による学習への効果として、次の2点が挙げられます。

- ・自ら当該教室に移動することによって、能動的に学習に向かう意識が芽生える。
- ・教科の学習に適した環境で学習できる。

このことについて、全校生徒にアンケートをとってみましたが、残念な結果がありました。アンケート結果によりますと、8割の生徒にとって、教室移動が学習意欲の喚起にはつながっていないのが現状です。

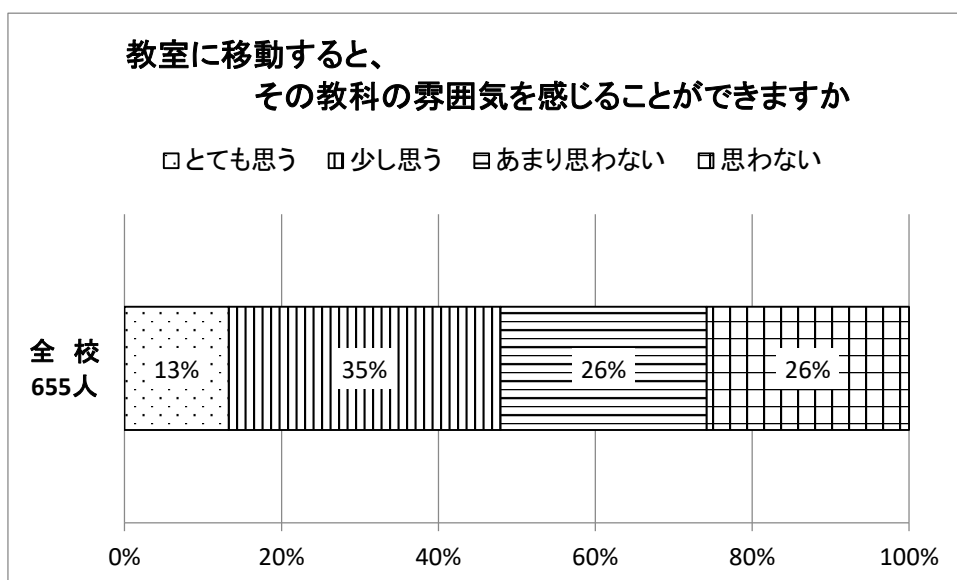


移動による学習への能動的な姿勢がアンケート調査から見られない理由は、各教科フロアの実環境整備、その環境を生かした授業づくりや授業展開にあるのではと考えています。こうした分析については、後述していきます。

4 教科ラウンジって、あんまり活用されていないんじゃない？

教科ラウンジとは、各教科フロアの中心的な場所に配置されているオープンスペースのことです。教科ラウンジには、その教科ならではの掲示物や実物模型などの展示がされており、教室を移動してきた生徒を、その教科の学習に誘う場所と言えます。

生徒は各教科フロアの教室に移動して、教科ラウンジに触れることによって、その教科の雰囲気を感じ取っているのでしょうか。アンケートから現状を見てみます。



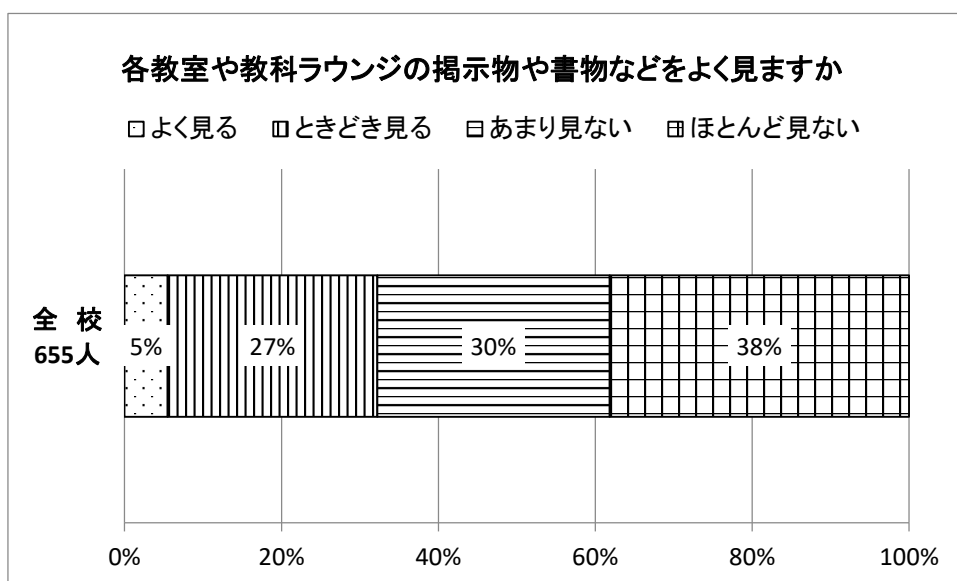
このアンケートからは、約半数の生徒が、各フロアの教室に移動することによって、教科固有の雰囲気を感じています。

5 教科教員室が近くにあるのは、いつでも質問できるからという話だけど、教室移動の為、質問する時間がないんだけど。

授業と授業の間の放課は 10 分間です。教科センター方式でない一般的な中学校でも放課は 10 分であるため、大口中学校では移動する分だけ、同じ 10 分では時間がないのではないか、と話題になります。

しかしながら、他の中学校でも、9 科目の教科のうち、理科、音楽、美術、技術家庭、体育の 5 教科は同様に移動します。そういう意味では、10 分という放課時間での教室移動は、大口中学校だけに限った話ではないことには議論をする際に留意が必要です。

下記は、「各教室や教科ラウンジの掲示物や書物などをよく見ますか」と問うアンケート結果です。これを見ますと、「ほとんど見ない」とする生徒が 4 割存在するという結果であり、10 分の放課時間に教科ラウンジに滞在する生徒を生み出せていないのが実情です。この結果から、次の教室に移動するため、教員に質問する時間も限られているであろうと推測されます。



6 授業中に寝ている子が多いって話を聞くけど。

寝ていても授業が進んでいく。

寝ている生徒がいるとしたら、当該生徒には、自己を見つめてほしいとは思いますが。しかしながら、教師がそのような授業をしていること自体に問題があるものと考えた方が、物事を改善していくための糧となると考えます。

日本の学校は伝統的に授業研究が盛んで、各学校はそれぞれ「現職教育テーマ」という授業研究課題が設定しています。そして、このテーマをもとに、全教職員が共通目標をもって日々の授業改善が図られていきます。

大口中学校の現職教育テーマは、「全員参加の授業づくり」です。本テーマにおける授業の主体は教師ではなく生徒です。生徒一人一人が授業の創り手として、学習課題に向かって協働して参加していく、そんな授業にしていきたいと大口中学校は考えています。

本編では、教科センター方式が、生徒の学習にどのように効果を与えているかとの問題意識の中で論じてきましたが、総じて述べれば、次のようになると考えます。

よき授業がなければ、教科センター方式の効果はない。教科センター方式の良し悪しの決め手は、授業である。

授業改善に、不断の努力が求められます。